

瀧一郎 訳

源氏物語

卷四



中公文庫 ©1991

潤一郎訳 源氏物語 卷四 改版

一九七三年九月一〇日初版発行
一九九一年八月二五日改版印刷
一九九一年九月一〇日改版発行

訳者 谷崎潤一郎

発行者 嶋中鵬二

整版印刷 大日本印刷
カバー トレープロ
用紙 本州製紙
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
ISBN4-12-201841-2
Printed in Japan

中公文庫
潤一郎
江苏工业学院图书馆

藏書章
氏物
卷四

改版



中央公論社

卷四
目次

紅 勾 雲 幻 御 夕 鈴 橫 柏
梅 宮 隱 法 霧 虫 笛 木

挿 挿 挿 挿 挿 挿 挿 挿
画 画 画 画 画 画 画 画
山 中 中 中 中 中 中 中
本 村 村 村 村 村 村 村
丘 貞 貞 貞 貞 貞 貞 貞
人 以 以 以 以 以 以 以

二七三 二五四 二五三 二三二 一九六 一〇三 八三 五八 七

竹河

橋姫

椎本

総角

插画 山本丘人

二九二

插画 山本丘人

三四七

插画 山本丘人

三九七

插画 橋本明治

四四七

解説

池田彌三郎

五六六

潤一郎訳 源氏物語 卷四

柏かしわ木ぎイ、光源氏四十八
歳

衛門督えもんのかんの君が、こんな具合に、引きつづいてお患わづらいになって、快方に向わないうちに、年イも改まりました。父大臣おとどや母北の方がお歎きになる有様を拝みますと、もうどうしても死んでしまおうと覚悟をきめていた甲斐かいもなく、先立つ罪の軽くないことを思うのですが、その心は心として、また翻ひるがえって考えてみるのに、そうあながちに、この世を離れがたく、残り惜しく感じて、踏み留とどまっていたいような我が身であろうか、小さい時から普通と違った心があつて、何事につけても人よりは一段立ち勝まさろうと、公おおやけ私わたくしのことにつけて並々ならず思いつていたものだけでも、なかなか望み通りには行かないものであることが、一つ二つと実地にぶつかつてみるたびごとに分つて来て、自分の無力を悟るようになってからは、世の中が何によらず面白くな

イ、憂くも世に思ふ心になはぬか誰も千とせの松ならなくに

〔古今六帖〕

ロ、夏虫の身をいたづらになすことも一つ思ひによりてなりけり

〔古今集〕

くなり、後世^{ごせ}の修行を深くも志すようになったものの、親たちの御落胆を思うと、それが野山にさすらい出る道のために大きな妨げにもなりそうなので、何とかかとか気を紛らしながら過して来たのに、結局やはり世の中に交^{まじ}わることができないような物思いが、一つならず身に取り憑^つくようになったのは、みんな自ら招^{みずか}いたことで、自業自得であると思えば、誰を咎^{とが}むべきでもない、神佛をも恨^{うら}みようがないのは、これもこういう風になる約束事なのであらう、「誰^いも千とせの松ならぬ」この世は、ついにはながらえていられないのであるから、こういう風に少しは人にも惜しまれる間に、仮初^{かりそめ}にでも不憫^{ふびん}をかけて下さるお方がいらっしゃるのを、「一つ思ひ」に燃えたしるしと観^{かん}じようではないか、強^しいて生きながらえていれば、自然忌まわしい浮名も立ち、自分にも人にも容易ならない厄介^{やっかい}な騒ぎが起るかも知れぬ、それより今のうちに死んでしまったら、けしからぬ男と思っておいでになるあたりでも、いくら何でもお許しになって下さるであらう、万^{よろず}の罪も、いよいよという最期^{さいご}の折には消えるものだ、このことよりほかには何の過^{あやま}ちもないのであるから、長年の間折ふしごとに御別懇^{ごべつこん}に願ったお馴染^{なじみ}がいに、可哀そうなとぐらいは思つて下さるであらうなどと、徒^{つれ}

ハ、今はこれまで
と私の遺骸を茶
毘に附しても、
燃え上る煙がい
つまでも消えず
に空にさまよう
て、尽きること
のない思ひの火
がやはりあとに
残るでございま
しょう。「思ひ」
に「火」を利か
してある

然のままにそれからそれへと案じ続けているのでしたが、思えば思う
ほどたまらなくあじきない心地がします。どうして自分はこう肩身を
せまくしてしまったのであろうと、胸も暗く思い乱れて枕も浮くばか
りに、やり場のない涙にくれていたのでしたが、少しおよろしいよう
だというので、看護の方々がお立ちになった隙に、かのおんあたりへ
おん文をお上げになります。「今日明日の命になつておりますことは、
おのずからお聞き及びでもございましょうに、どうなったかとだけで
もお心におかけ下さいませんのは、お道理ながら情のうございます」
などとしたためますのにも、たいそう手がわななきますので、思うこ
とも大概は書かずにしまつて、

「今はとて燃えん煙もむすぼほれ

たえぬ思ひのなほやのこらん

不憫とだけでもおっしゃつて下さい。そうしたら気を落ち着けまして、
そのお言葉を我から迷う闇路の光ともいたしましょう」と申し上げら
れます。小侍従にも、なお懲りずまに哀れなこともを言ってお寄越
しになります。「お目にかかつて、今一度お話したいことがあるので
す」とおっしゃつてお遣りになりますので、この女房も、幼い折から

イ、小侍従の伯母
は柏木の乳母な
のである。「若
菜」下四四六頁
参照

伯母の縁故で出入りをさせていただいていて、お近づき申し上げていたことですから、あまり厚かましいなされ方に気を悪くしてはいましたものの、御危篤と聞いてはさすがに悲しくて、泣く泣く、「やはりこの御返事はなすってお上げなさりませ。ほんとうにこれが最後でございましょう」と申し上げますと、「私も今日か明日かのような心地がして、心細く思いますので、病氣と聞けば可哀そうとだけは感じますけれども、もうほんとうに厭らしいことと、懲り懲りしてありますので、考えても恐ろしい氣がします」と仰せになって、一向書こうともなさいません。御性質が重く、どっしりとしていらっしゃるのではないのですが、大殿のおんけはいが氣になつてたまらず、折々やんわりとおっしゃいますのが、無性に恐ろしく辛いからなのでしょう。でもおん硯などを参らせてお責め申し上げますと、洩々おしたためになりましたので、それを持って小侍従は、こっそりと、宵の紛れに彼処へ参上するのでした。

父大臣は葛城山からすぐれた行者をお請じになつて、それが来次第加持をさせようとお待ちになつていらっしゃいます。御修法だの読経だのと、御殿のうちはえらい騒ぎです。人の申すままにさまざまな聖

口、陀羅尼は梵語
の呪である。そ
れでことさら無
気味なのであ
う

僧めいた験者どもの、あまり世間にも知られずに深い山に籠こもっている
ようなのを、弟の公達きんたちを遣つかわして捜し出させてお召し寄せになりま
すので、変に小憎らしい怪しい山伏どもなども大勢集って参ります。
御病人は何ということもなく、ものを心細く感じて、時々は声を出し
てお泣きになります。陰陽師おんようじなども、大抵は女の霊の仕業しわざであるとば
かりお占い申し上げますので、あるいはそうかともお思いになるので
すけれども、さっぱり物怪もののけの現われて来るものもないのにお困りなさ
れて、こんな具合に山の奥から行者を連れていらしたのです。そ
の葛城ひじりの聖ひじりというのも、身の丈たけが高く、険けつしい眼つきをした男なので
すが、荒々しく仰々しい声を立てて陀羅尼どらにを読みますので、「えゝ、癩しやど
に触さわる。何の因果でこんな日に遭あうのか。陀羅尼を大声で読み上げら
れると、とても気味が悪くていよいよ死にそうな気がする」と、そう
つと脱け出して、かの侍従にお会いになります。父大臣はそんなこと
とは御存じありません。「お寝やすみになつていらつしやいます」と、旨
を含められている女房たちが申し上げますので、そうだとばかりお思
いになつて、今の聖と忍びやかに話していらつしやいます。年はお召
しになりましたけれども、相変らず闊達かつたつなところがあつて、よくお笑

いになります大臣が、そういう者どもとさし向いになって、わが子が病氣にお罹りになった当時の有様から、何となく寝たり起きたりしているうちにだんだん重くおなりなされたことなどを仰せ聞けになり、「ぜひこの物怪が現われるように祈つて下さい」などとねんごろにお頼みになりますのも、まことにおいとおしい情景なのです。

「あれをお聞きなさい。父上は何から起った病であるともお分りにならないのですが、もし験者たちが占ったように女の霊の仕業だとして、本当にかのおん方の執念が私に取り憑いていたのでしたら、愛憎の尽きたこの身も、打って變つて貴いものになるでしょう。それにしても大それた心から、とんでもない間違いを引き起して、人のおん名をも流し、自分の身をも顧みないという類は、昔の世にもなくはなかったと思ひ直してみるのですけれども、やはり何としても胸が安まりませんし、こういう科をあの院が知っておしまひになりました上は、生き長らえていることがとても面映い氣がしますのは、全く普通の人は違つた御威光のせいなのでしょう。何も大した過ちもないのに、あの院とお顔を見合わした試楽の日の夕べから、引きつづいて氣分が悪く、この体から抜け出して行つた魂が、そのまま戻つて来ないようになり

イ、魂は見つ主は
 誰とも知らねど
 も結びとどめよ
 下がひのつま
 「葵」三七八頁
 頭注イ参照

ロ、「若菜」下四
 五五、四五六頁
 本文、四五八頁
 頭注イ参照

ましたが、もしあのおん方のあたりをでもさ迷い歩いているのでしたら、どうか『結びとどめ』ておいて下さい」などと、見るから弱々しく、魂の脱殻ぬけがらのようになって、泣いたり笑ったりしながらお話しになります。小侍従は宮もたいそう恥じ入って世間を恐れておいでになる様子を話します。と、さもしおしおと打ち沈んでお瘦せやせになったおん面影が、幻まぼろしにお立ちになったようにおん眼に浮かんで来ますので、いかさま魂があくがれ出て行き通うのであらうなどと、いよいよ心地も掻き乱れて、「いまさら宮のおんことは、もう決して申しますまい。こんな具合にはかない一生を終わりますにつけ、この一念が後々までも成佛じょうぶつの妨げになるかと思うと、ほんとうに悲しいのです。ただならぬお体でいらっしやいますのに、せめて御安産とだけでも伺って死ぬわけには行きますまいか。いつぞや見ました夢ゆめのことを、自分一人の心で思い合わせて、誰と語り合うこともできないのが、ひどく氣術きじゆつないのです」などと、いろいろのことを取り集めて、しんみりと深く思い詰めておられるらしい様子なので、一方では氣味悪くも、物凄くも思いうのですけれども、さすがに哀れが感じられて、たまらなくなつて、この女房も激しく泣きます。

イ、九頁の柏木の歌の文句をさす口、私もいろいろと心配事のために思い乱れていますので、どちらが一層苦しんでいるかを比べるうちに、あなたの煙に立ち添うて自分も消えてしまうかも知れません。「煙くらべ」は「おもひみだるる」の「おもひ」を「火」に見立てた縁で、「煙」という語を持つ

紙燭^{しそく}を取り寄せて、おん返りごとを御覧になりますと、おん手もまだたいそう弱々しく、やさしくお書きになりました、「気の毒には思いますが、見舞いには行かれませんか。ただお察しするだけです。『のこらん』とありますけれども、

立ちそひて消えやしなまし憂き事を

おもひみだるる煙くらべに

私もあとになるようなことは」とばかりありますのを、悲しくも忝^{かたじけ}なくも思います。「あゝ、この『煙』とあるお言葉だけがこの世の思ひ出になろうとは。あつけないことだった」と、一層お泣きになります。して、おん返りごとは横になりながら休み休みおしたためになります。文句のつづき具合もおぼつかなく、しどろもどろな鳥の足跡のような筆づかいで、

「行くへなき空の煙となりぬとも

おもふあたりを立ち離れじ

夕暮には、わけても空をお眺めになって下さいましよ。私が亡^なき魂^{たま}になつてしまひましたら、どなたもあなたをお咎めになるはずはございませんから、今は心安く思いなされて、もう甲斐のないことでは

二、光源氏

て来たまでである

ハ、火葬によつて行くえも知れぬ空の煙となりましようとも、思うおん方のあたりからは離れますまい。「立ち」は煙の縁語

れども、せめて不憫とだけは絶えずお思いになつて下さい」などと乱れ書きに書きちらして、氣持の苦しさが増して来ましたので、「ではもうこれで。あまり更けないうちにお帰りになつて、この通り今が限りの有様でおりますと申し上げて下さい。世間の人が何か仔細がありそうに思つて訝しむであらうと、死んだ後のことまでが氣になるのは口惜しいことです。どういふ前世の因縁で、こうもこのことが心に食ひ入つたのでしょうか」と、泣く泣くいざつておはいりになるのですが、平素はいつまでも引きとめて、冗談などをさえ言わせたそうになさいますのに、今日はろくろくお話もなさらないでと思ひますと、小侍従は悲しくなつて帰る氣にもなれないのです。伯母の乳母も御容態を語つて、たいそう泣き惑うています。父大臣などの御心痛の傷々しさ。「昨日今日は少しよろしい方だったのに、なぜまた弱られたのであろう」とお騒ぎになります。「いいえ、やつぱり助からないのでございましょう」と申し上げられて、自らもお泣きになります。

宮はその日の暮れ方からお悩みになりましたが、お産の御氣色と看取つた人々が大騒ぎをして、大殿にも申し上げましたので、驚いてお渡りになりました。お心のうちでは、あゝ口惜しいことだ、これが